

第4次高梁市教育振興基本計画策定検討委員会（第1回） 要旨

日 時：令和7年8月21日（木）

13：30～15：30

場 所：高梁市役所 3階大会議室2・3

<出席委員> 11名

井勝委員、藤森委員、日名委員、太田委員、森本委員、三上委員、那須委員、菅田委員
常浦委員、矢動丸委員、松本委員 ※欠席：片岡委員

<事務局> 8名

小田教育長、伊丹教育次長、福原参与、藤井教育総務課長、三宅こども教育課長
亀山社会教育課長、野口スポーツ振興課長、羽井佐教育総務課長補佐

1 開 会

2 教育長あいさつ

教育振興基本計画は、教育委員会関係の計画の中で最上位に位置付けられるものです。かつて学校教育に対して「閉鎖的である」との指摘が強くなされていた時代には、教育のあり方や方向性について、関係者だけでなく、首長・議会・市民など幅広い立場の人々と議論を重ねることが求められてきました。その中で、教育基本法の改正において最も重視されたのが、この計画の策定であると考えています。本市では今回が第4次の計画策定となります。これまで計画に沿って取り組む中で、実際の活動と十分にかみ合わない面もありましたが、一方で計画を立てたことで大きく前進した部分も少なくありません。計画の策定作業は容易ではありませんが、学校教育や生涯学習の充実につながるよう、委員の皆様のご意見をいただきながら、実効性の高い前向きな計画としてまとめていきたいと考えておりますので、よろしくお願いします。

3 自己紹介

4 高梁市教育振興基本計画策定検討委員会について

5 会長、副会長の選出について ※事務局案を提案

会 長：井勝委員

副会長：日名委員

<会長あいさつ>

まち・ひと・しごと総合戦略会議の委員も携わっており、今年度は総合計画（後期計画）の策定を進めています。第4次教育振興基本計画についても総合計画と一体的に策定していくことになると考えています。総合戦略会議の委員との意見交換の中で、総合計画を策定し実行していくにあたっては、市民の意欲を高め、情報提供をしっかりと行うことが必要

であると確認しました。また、市の持続性を高めるためには、計画そのもの以上に「人づくり」が重要であるという認識も共有しました。このように、教育振興基本計画は、まちづくりや地域の活性化を考えていく上で極めて重要な位置づけを持つものと考えていますので、委員の皆様のご協力をお願いします。

6 議 事

(1) 第3次高梁市教育振興基本計画における成果や課題について

＜委員意見等＞ ○：検討委員 ⇒：事務局

○ 全体像として、各所で「継続的な活動支援」や「連携」という表現が使用されていますが、具体的に「支援」とは何を指しているのでしょうか。

⇒ 支援の内容は事業によって異なりますが、人的支援や制度による補助などを継続的に行うものです。例えば、P 8 の「個に応じたきめ細かな指導」の項目においては、G I G A スクールサポーターを配置ということで、学校に対して継続的な人的支援を行っています。

○ P 1 1 の目標指数の「将来の夢や目標を持っている児童生徒数の割合」について、小学6年生の数値が下がっていることが気になります。県の教育基本振興基本計画では、夢育が推進されていますが、数値が下がっている理由をどのように捉えていますか。

⇒ 明確な根拠を示すのは難しいですが、学年ごとの特色やカラーもあるため、差異が生じていることはご理解いただきたいと思います。単に数値が下がっているというよりも、「学校に行くのは楽しい」「授業がよく分かる」といった関連項目も少し低下しており、そのことから子どもたちの意識や思いにも変化が見られると感じています。

○ P 1 8 の就学前教育アドバイザーの配置については、どのような方が担い、また、どのような活動を行っているのでしょうか。

⇒ 元小学校長と元幼稚園教諭の2名を配置し、各園を訪問して指導を行っています。また、「架け橋カリキュラム」として、就学前と小学校教育の接続を重視した教育課程を編成する際に助言をいただいています。さらに、就学前の子どもたちが小学校へ進学する際、さまざまな学びの場を選択する場合には、支援や助言をいただいています。

○ P 4 2 に「宿泊施設との連携でスポーツ合宿受入数が目標を大きく上回った」との記載がありますが、具体的にはどの施設でしょうか。

⇒ 神原荘です。神原にはスポーツ公園があり、野球場やサッカー場を併設しています。さらに、テニスコートについては備北地区で最も多いコート数を有しています。「シャトルム」を核として、地域おこし協力隊が合宿の誘致を進めており、これまでの課題であった「限られた施設をいかにマッチングさせるか」という点に取り組んできました。具体的には、平日や夏休み・冬休みの合宿をどれだけ確保できるかを重視し、連携しながら進めてきたことが成果につながっていると考えています。

○ P 3 8 に「総合型地域スポーツクラブの加入者数減は下げ止まり」という記載があ

りますが、4年間で数十人単位の減少が続いており、令和7年度の会員数は93人と伺っているのですが、どのような根拠で下げ止まりと判断されているのでしょうか。

⇒ 総合型地域スポーツクラブ（ピオーネ）については、市として後方支援や事業企画など伴走支援を進めてきましたが、十分にできていなかったことを大きな課題と認識しています。加入者数の減少は、コロナ禍の影響が最も大きく、加えて参加者の高齢化も要因と考えられます。今後は、クラブ自身と市の双方でPRを強化していく必要があると考えています。

○ 広報することにより、会員数の減少がどのように改善すると考えられますか。

⇒ ピオーネの会長からは、マンパワー不足や活動資金不足が課題であると伺っています。一方で、スポーツ協会のメンバーなどからは、ピオーネの活動内容が十分に認知されていないとの声があり、学校関係を含めた多世代への認知不足が指摘されています。そのため、まずは活動を知ってもらうことが重要だと考えています。活動の周知を市が主体となって進めるのか、ピオーネと連携して進めるのかについて、現在模索しながら意見交換をしています。

○ P40について、部活動の地域展開にも関連することですが、スポーツ少年団の小規模化や指導者育成の不十分さが課題となっています。高齢化や担い手不足という現状にあって、市が広報を行うことで、地域のスポーツ団体の活動計画をどのように促進できるのか見えにくいと感じます。

⇒ 人口減少は全体的な課題ですが、スポーツ少年団の中には、団員不足や指導者育成に課題を抱える団体もあります。私たちも補助金などによる支援や連携した取組を進めてきました。地域全体では人口減少や活力の低下が指摘される一方で、スポーツ少年団は元気な組織の一つだと感じています。ただし、団体によっては苦勞しているところもあり、その要因としては子どもの減少が最も大きいと考えています。

○ 松山踊り保存団体の解散に見られるように、地域住民の団体は多くの分野で同様の課題を抱えています。困っている団体に補助することは一つの政策手段ですが、そもそも困難な状況が生じていることを踏まえると、支援や連携の在り方自体に課題があると考えます。実際に、ピオーネやスポーツ少年団なども活動が難しく、住民の担い手だけでは維持できない実態があります。こうした状況に対して、市がどう支えるのかは、家計が厳しい家庭への個別支援と同じような構図で、団体ごとの個別対応が持続的・継続的な支援となり得るのかには疑問を感じています。

⇒ 特定の団体だけを支援する施策ではありません。人的支援やアドバイスなどを行うもので、例えば人数が少なくなった団体に対しては、同じ競技を行う複数団体の統合を提案するなどの支援をしています。実際に、野球では既に統合が進み、成功している事例もあります。こうした成功事例を紹介し、参考にしてもらうことも有効な方策の一つと考えています。

○ 市民団体には独自性があるため、その点を尊重しつつ、地域の活性化や社会教育、学校教育の観点を踏まえ、状況に応じた支援を市として行っていく必要があると考えて

います。支援の方法については、今後の計画づくりの中で意見も踏まえながら、適切な形を検討してください。

- P 2 8 の図書館活用に関する課題として、図書館から商店街等への来訪者の周遊が少ないと記載されていますが、その根拠となる数値や目標指標等について教えてください。

⇒ 高梁市図書館は平成 2 9 年 2 月にオープンし、平成 3 0 年度には来館者数が 6 0 万人に達しました。その後、コロナ禍の影響で 5 0 万人を下回る時期もありましたが、現在は 5 0 万人規模まで回復しています。一方で、実際に商店街を歩いてみると、来館者の周遊は十分に広がっていない状況です。松山城の来場者数なども把握している中で、図書館の指定管理者もこの点を大きな課題と認識しています。いかに図書館から周辺へ人の流れをつくるイベントを企画できるかを常に模索しており、市としても指定管理者と連携しながら取り組んでいる状況です。

- 社会教育施設かつ図書館の機能の観点から見方を変えると、利用者が離れないという点で非常に充実して、機能を果たしているとも捉えられます。一方で、図書館に対して、近隣商店街など産業振興への収入効果を促すことを課題として掲げるのは、少し重すぎるように感じます。

仮に今後もこの点を課題として挙げるのであれば、図書館の社会教育施設としての役割と、来館者の周遊による産業振興の役割は、別の評価項目や指標として分けて考えるべきだと思います。また、産業振興の側面から図書館との連携がどのようになされているのかも整理しておかないと、「産業振興」と「社会教育施設」という二つの視点がちぐはぐに並んでしまい、課題設定として違和感を覚えます。

(2) 第 4 次高梁市教育振興基本計画の概要について

<委員等意見>

- 基本目標は大きなテーマになっていますが、実際には、子どもたちがどれだけ意欲を持って勉学に励んでいるのか、友達同士で心豊かに、穏やかに健康づくりやスポーツに取り組み、いじめもなく過ごしているのか、といったことが大切だと思います。また、地域の人との関わりも重要で、地域の方と触れ合いながら、ボランティアの方と一緒に清掃活動をし、行事に参加することによって、地域とのつながりが深まります。さらに、スポーツに関しても地域の方々のアドバイスを受けることで、学習に対する意欲や集中力が高まっていくのではないかと思います。大きな課題であっても、小さなことから一つひとつ確実にクリアしていくことが大切だと考えます。

- 基本方針(1)⑦に「就学前から小・中・高、さらに大学までも～」と記載されていますが、大学に限定するのはどうなのかという印象を受けましたので、その点も検討していただけたらと思います。

- 全面的に賛同している前提ですが、これまでの計画の評価を見ていく中で、これらの取組を「誰がどのように行うのか」が少し不明瞭で、支援の方法やアプローチ先が見えにくい点が気になっています。例えば、基本方針(1)の⑥「地域と連携・協働する」

という部分についても、誰とどのように協働するのが明確であるとよいと思います。多様な人々が関わる中で、具体的な役割が共有されていれば、課題解決にもつながると思います。

また、担い手が個人に頼る形だと、その人がいなくなれば活動が継続しません。誰が受け手で、誰が何を行うのが明確でないと、具体的な活動に結びつきにくいのではないかと思います。そのため、こうした人々をつなぎ、集めるハブとなる組織や拠点を、市として設ける方向性が必要ではないかと考えます。

- 全面的に賛同します。ただ、少し気になることとして、現行の内容には「ふるさと」や「地域」といった言葉が入っていますが、新しい案では「ふるさと」という言葉がなくなり、「社会」という大きな言葉に置き換わっている印象を受けました。もちろん社会という広い視点に広がるのは良いことだと思います。その一方で地域やふるさと、あるいは高梁らしさのような要素が大きな目標から抜けてしまっている点が気になります。実際、他の自治体の教育大綱でもその地域ならではの言葉が盛り込まれている例が多く見られます。基本方針の部分には地域という言葉が出てきますが、最も大きな基本目標に社会という言葉が前面に出ていることに少し違和感を覚えます。読む人が自分ごととして受け止めやすい表現にするためにも、社会だけでなく、地域やふるさとなど、より身近に感じられるキーワードを盛り込むと良いのではないかと思います。

- よくまとまった分かりやすい基本方針だと思います。改めて意見を提出したいと思います。

- 基本目標である「一人ひとりの幸せとよりよい社会を実現する人づくり」について、就学前教育に携わる立場から、その基礎は就学前にあると考えています。「このような人に育って欲しい」という思いを持ちながら、子どもたちを育てていきたいと感じています。

- これからの時代の視点として、ウェルビーイングや多様性という方向性が重要だと考えていましたので、この基本方針は自分がイメージしていたものが反映されていると感じています。

また、気になったこととして、基本方針（１）の「③多様な教育ニーズへの支援」と「⑧地域に応じた教育体制づくり」の整理が必要なのかと考えます。⑧は少子化の中で、集団生活を通じて社会性を育て、切磋琢磨する環境が得にくくなっている現状を踏まえた体制づくりというイメージで、一人ひとりのニーズへの支援は③で整理していくという位置づけになるのではないかと感じました。

- 市内の各学校では、それぞれの特色に応じて地域と連携し、地域に根差した学びの場を提供していると認識しています。適正配置計画に基づき、学校の統廃合が進む中において、これまで培われてきた地域密着型の学習機会が失われないように配慮した計画策定をお願いしたいと思います。

また、私の子どもが入学した当時はコロナ禍で、行事や活動が大幅に制限されていました。現在は活動が回復しているように見受けられますが、コロナ禍以前の状況に戻

っているかは不明です。もし十分に回復していないのであれば、その要因がコロナの影響なのか、児童・保護者数の減少なのか、教職員数の変化や働き方改革等の要因なのかを精査し、検証結果を踏まえた計画にしていきたいと思います。

- 基本方針に「地域と家庭、学校、行政が協働しまち全体で子どもたちを育てていく」という表現になっています。これまでもコミュニティスクール等を通じて、地域が学校の中に入り、さまざまな活動をされてきたと思います。今後、こうした取組はますます重要になると思いますが、統廃合により「学校がない地域」が出てきます。そのような地域では、子どもはいても学校がない中で、家庭・子ども・地域がどのように協働できる体制を築くのか、不安を感じています。

市内には14の公民館があり、それぞれの地域にはまちづくり協議会やまちづくり推進委員会も存在します。そうした場を活用して、家庭や地域の人たちと子どもたちをつなぐ役割を果たしていく必要があると思います。基本方針自体は非常に良いと思いますが、その具体化にはかなり工夫が求められるのではないかと感じました。

- 現行の教育大綱にある「大志を抱き未来を拓く」という言葉は、とても力強く印象的で、高梁市の目指す方向性を端的に表していると感じました。新しい大綱については、全体として上手にまとめられているという印象を持っています。ただし、「一人ひとりの幸せ」という部分については、個々で捉え方が違います。社会の制度や環境が整っていなければ、幸せが実現しにくい面もあり、個に大きく影響されると思います。市として考えていくべきなのは「よりよい社会」の部分だと思います。市として、どのような社会を「よりよい」と考え、どのような市を目指すのかという具体像をどこかには示して欲しいと感じました。

また、「家庭の教育力の低下」という言葉を耳にすることがあります。ただ、明確な指標があるわけではないので、数字では示せませんが、新しい項目に「家庭」という言葉が明確に示されたことは、歓迎しています。

- 学校教育と社会教育が連携しながら、教育や人づくりに取り組んでいく必要があると思います。この基本目標に向かって、一つずつ具体的な取り組みを作っていくことが重要です。

大きな目標の部分は、逆にわかりにくくなることもあるかもしれません。ただ、「幸せ」という概念については、総合計画の中でも「幸福」として取り上げられており、個々で異なるものと同様のご意見がありました。

もちろん、幸せの感じ方は個人によって異なるため、目指すべきものとして捉えるのは難しい面もありますが、客観的な指標として捉えることも可能です。ここで大切なのは、主観的な指標と客観的な指標をどう組み合わせていくかという点です。客観的な指標が向上することで、まち全体の幸福度も上がっていくと考えられますので、幸せとウェルビーイングを具体的に示す指標を作る際には、主観と客観の両面を考慮することが重要だと考えています。

(3) 今後のスケジュールについて

(4) その他

- ・意見の提出について
- ・次回開催について（令和7年10月2日（木）13：30～）

7 閉 会（副会長あいさつ）

本日は長時間にわたりご協議いただき、誠にありがとうございました。具体的な課題から大きな目標まで、さまざまな視点で考えていく必要があると感じています。この先の5年間で何を目指すのかを考えるにあたっては、高梁がどの方向に進むのかという大きなイメージを持ちながら、目の前の計画を立てていくことが重要だと思います。人口減少は避けられませんが、「ヒト」「モノ」「コト」「カネ」を意識し、具体的に何ができるのかを考えていかなければなりません。もちろん、最善（ベスト）は難しいかもしれませんが、より良い（ベター）を目指して取り組んでいければと考えています。価値観の異なる人々いる中で、皆でまとまって目指していく姿を示せばいいと思います。今後とも引き続き、よろしく願いいたします。